

「マリアの恵み」は「私の恵み」

ルカ 1:26-38

今日の説教題は「マリアの恵み」は「私の恵み」というものです。聖書は私のために、あなたのために書かれました。実際に聖書は現在から遡ること約3,500年前から1,900年程前の間に書かれています。数多くの人物が神に様々な方法で取り扱われたことが書かれています。その人たちはもちろん全知全能なる神の御業と導きを体験していますが同時に読む人にその人たちを通して神様ご自身が表されています。つまり聖書を通して神様は私に語りかけて下さっているのです。ですから今日の箇所に出てくるマリアが受けた神からの恵みはマリアを通して神は私たちに恵みを伝えようとされているのです。

「おめでとう、恵まれた方。」この言葉は、御使いがマリアに神の子を宿すことを知らせたとき、いわゆる「受胎告知」のときに語られた言葉です。受胎告知を受けたときのマリアは15歳前後の少女だったとされています。それが当時の一般常識でしたから。「恵まれた方」という言葉がナザレの村の一少女にかけられことは驚きですが、そのことに一番驚いたのは、マリア自身だったと思います。しかし、マリアはこの言葉に驚いただけで終わらず、その言葉の意味を理解しようと努めました。私たちも今日マリアのようにこの言葉の意味を理解したいと思います。なぜ、マリアが「恵まれた方」と言われたのでしょうか？ マリアがどのような信仰でその恵みを受け取ったのでしょうか？それを考えてみたいと思います。

マリアに与えられた恵みは、神の御子の母となるという恵みでした。この恵みは、全世界にどれほどの女性がいようと、ただひとり、マリアにだけ与えられた恵みでした。マリアの先にもあとにも神の御子の母はいないからです。それで、エリサベツはマリアに「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」(ルカ 1:42)と言ったのです。このようにマリアは特別に祝福を受け、何十才も年上の親戚のエリサベツがマリアのことを「私の主の母」1:43と呼ぶほどであったことから聖母マリアと神格化されていった歴史があります。神の御子の母であるのだから神とは言わなくても神同様の特別な力をもっているに違いない。このように考えるのはそれほど不自然なことではありません。しかし、「恵まれた方」「神の御子を身ごもる」「女の中で最も祝福された方」これらの言葉は、決してマリアを神格化するものではありません。マリアは「主の母」と呼ばれていますが、「母なる主」とは呼ばれていません。十戒の第一戒は「あなたはわたし以外に、ほかの神があってはならない」と言っていますから、マリアを女神のように礼拝することは間違っています。しかし、十戒の第五戒では「あなたの父と母を敬え」とあります。ですから私たちがマリアを信仰の母、また信仰者の模範として敬うことは間違っていないと思います。むしろそうすべきだと思います。「結局、マリアもどこにでもいる普通の母なのだ」と片付けるわけにはいかないのです。

実際マリアはわたしたちが見習うべき信仰を持っていました。それは、ルカ 1:45にあるエリサベツの言葉に表されています。「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」とあるように神がマリアに御子の母となるという恵みをお授けになったのは、マリアのこの信仰のゆえだったのです。年が若くて社会経験も何もない少女でありましたが神様のことばを信じて疑わなかったのです。平凡なごく普通の女性ではありましたが信仰においては非凡であったのです。「恵み」とは、「それを受けるのにふさわしくない者に与えられるもの」です。受けてあるいは手にして当然のことを恵みとは言いません。誰も神の御子の母となることのできるほどの立派さを持った人はいませんから、ごく普通の少女であったマリアが御子の母とされたのは「恵み」以外の何ものでもありません。しかし、だからといってマリアには神に喜ばれるものが何もなかったわけではありません。マリアには神の恵みを受け取るのにふさわしい信仰があったのです。マリアはまだ年若かったので、その信仰はまだ成熟しておらず、足りないところがあったかもしれません。あるいは自分の信仰者としての生きざまをうまくことばに出して言えなかったかもしれません。しかし、マリアの信仰は純粹で、従順で、真剣なものでした。私たちは信仰生活が長くなってくるとキリスト教や教会に関する用語や言葉遣いが巧みになってゆきます。そして信仰者としての証しや生き方の説明をする時に美しい言い回しや無難な表現を用いるようになり、ともすれ

ばそれが自分の信仰の実体であるかのように錯覚してしまうことがあります。大切なのは基本となっている信仰そのものなのです。

当時、結婚もしない少女が、しかも婚約者がいるというのに、父親が誰とも分からず妊娠、出産するという事は、とんでもないことでした。それこそマリアにとって御子の母になるというのは、人間的に考えると「恵み」どころか、恐ろしい「呪い」のようなものでした。嬉しいどころかこれからのことを考えたら恐怖しか起こらなかったことでしょう。ですから神の言葉に聞き従う信仰がなかったら、たとえ神からであっても、そんな申し出は受け入れられないと考えたことでしょう。しかし、マリアは御子の母になるという言葉を受け入れました。しかも、誰に相談するわけでもなく、たったひとりで受け入れています。未婚の自分がどうして御子を産むようになるのか、マリアにはまったく分かりませんでした。しかし、マリアは「神にとって不可能なことは何もありません。」(ルカ 1:37) という言葉を信じました。そして、「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」(ルカ 1:38) と答えたのです。エリサベツが「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」と言ったのは、このマリアの信仰を褒めてのことでした。

いつの時代も、有名な人の母親は、特別視されたり、尊敬されたりするものです。イエスがラビ(教師)として有名になると、母マリアも人々から注目されるようになったようです。あるときイエスが人々に話しておられると、群衆の中からひとりの女性が声を張りあげて言いました。「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです。」(ルカ 11:27) と。この女性も母親だったのでしょう。同じ母親として、イエスのような息子をもった母親を尊敬してそう言ったのです。ところが、イエスはこう言われました。「幸いなのは、むしろ神の言を聞いてそれを守る人たちです。」(ルカ 11:28) この言葉は、肉親の愛を否定するものではありませんが、肉親のつながり以上に信仰のつながりが大切であることを教えようとした言葉です。実際、主イエスと母マリアの間には、母と子という関係だけでなく、主と弟子という信仰の関係がありました。母マリアこそ「神の言葉を聞いてそれを守る人」でした。わたしたちはマリアを人間的にあげめるのではなく、神の言葉を信じ、受け入れ、それを守り通したマリアの信仰に倣いたいと思います。それこそが「恵まれた人」となる道なのです。

「おめでとう、恵まれた方」の「おめでとう」には、もとの言葉では「大いに喜べ」(リジョイス) という意味があります。このクリスマスに、わたしたちは、救い主がわたしたちのために生まれてくださったという「大きな喜び」を祝います。では神様はどんな人を喜ばれるのかというなら「御言葉を聞いて信じ、それを守る人」を喜ばれるのです。わたしたちも御言葉を信じる信仰によって神に喜んでいただける者になりたいと思います。誰かを喜ばせる自分ではなく、神を喜ばせる自分でありたいと思うのです。そして、その神の喜びをわたしたちも喜ぶものになりたいと思います。クリスマスの喜びとは、じつに、この信仰の喜びなのです。

そうであるなら、マリアに与えられた恵みは、たんにマリアだけのものでなく、わたしたちへの恵みでもあることが分かります。わたしたちも、マリアのように神の言葉を信じて受け入れるなら、神からの恵みを受けることができるのです。マリアはヨハネの福音書で「ことば」と呼ばれているお方を宿しましたが、わたしたちは、聖書の「言葉」を心に宿すことができるのです。また、マリアが御子を生んだように、わたしたちも、心に宿した神の言葉によって、神の子どもたちを生み出すことができるのです。

コリント第一 4:15 で、パウロはこう語っています。「たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人も、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」使徒パウロは、ここで、福音を伝えることによって、神の子どもたちを生んだと言っています。もちろん、人を神の子どもとして生むことができるのは聖霊です。しかし、その人間の側ではイエス・キリストを信じる必要があります。そして信仰を持つためには福音を聞かなければなりません。そして、福音が聞かれるためには、それを伝える人が必要です。そういう意味では、パウロはそ

の福音の宣教によって神の子どもを生み出したのです。

パウロは、また、ガラテヤ 4:19 で「私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。」と語っています。コリント教会の人に対しては自分が「父」だと言ったパウロは、ガラテヤ教会の人に対しては自分を「母」になぞらえています。神の子どもたちが生まれ、育っていくのは、神の言葉によってです。ですから、神の言葉を伝え、教える人は、信仰の子ども、霊の子どもを産み、育てていることとなります。これはマリアが御子を産み、育てたことに匹敵する大きな恵みです。「おめでとう、恵まれた方」とは、このように御言葉を伝え、教え、それによって信仰の子ども、霊の子どもを生み、育てている人にもあてはまる祝福の言葉なのです。

今年もあと残すところあと三週間程度となってきました。皆さんは、どれだけの神の言葉を心に宿しておられるでしょうか。神の言葉はどこにありますか。それはまだ紙とインクの中にとどまったままではありませんか。あるいは、あなたの頭の中にだけでしょうか。それは、どれだけ聖句を暗記しているかということではありません。みことばはあなたの中で育まれているでしょうか。御言葉があなたのうちで命となってあなたを生かしているでしょうか。み言葉に示されて決断されたり、行動が変わったことがあったでしょうか？ 御言葉を心に宿すとは、神のいのちを自分のうちに持つことなのです。母親はその胎児に栄養を送り、胎児の命を支えます。そうやって私たちは生まれてきました。同じように御言葉の命が、それを宿している人を支え、生かすのです。神の御子が人となって生まれてくださった。この奇蹟の中の奇蹟は、形を変えてですが、御言葉を宿す者の中に、今も起こります。御言葉によって、キリストがわたしたちのうちに生まれ、御言葉を信じる者が神の子どもとして生まれ変わるという奇蹟です。今年も洗礼を受ける人が起こされましたがその人たちだけではありません。すべての信仰者にはみことばによって生かされ、変えられるということが約束されています。今年のクリスマス、このみことばによる奇蹟が起こることを、期待し、信じて祈ろうではありませんか。(祈り)

父なる神さま、このクリスマスに、わたしたちは、救い主がわたしたちのために生まれてくださったという「大きな喜び」を祝います。父なる神様にとっての喜びは罪びとが悔い改め、キリストを信じて神の子どもとして生まれる者がおこされることであり、加えてみことばによって信仰者が生かされ、変えられ続けるということです。そのためにも、わたしたちを御言葉を宿し、み言葉に生きる者としてください。主イエスのお名前です。